

『 IICP 退職給付会計体系マップ 』 退職給付会計ワークシート解説編 最終改訂日 2010/8/5

体系マップの読み方: 各シート間を結ぶ矢印に付いているコメントで各シート間の関係を把握しながら、各シートの標題のアルファベット順(A、B、C...)に読み進めて下さい

印刷時のご注意: 印刷モードを「高画質」に設定の上、「A3カラー」で印刷して下さい

【Point②】: 退職給付 B/S 上の項目の増減を中心に考える
 ⇒ 退職給付 B/S 上の資産項目(例: 年金資産) = プラスの項目(カッコなし)が、増加する場合はプラスの金額(= カッコなし)、減少する場合はマイナスの金額(= カッコあり)を入力する
 ⇒ 退職給付 B/S 上の負債項目(例: 退職給付債務) = マイナスの項目(カッコあり)が、増加する場合はマイナスの金額(= カッコあり)、減少する場合はプラスの金額(= カッコなし)を入力する

【Point①】:
 退職給付 B/S 上の各項目ごとに左から右へ(= 期首から期末へ)数字が流れている

【Point③】:
 退職給付債務及び年金資産について、期末予定と期末実績との差額を当期発生数理計算上の差異として合計し、未認識数理計算上の差異の欄へ振り替える

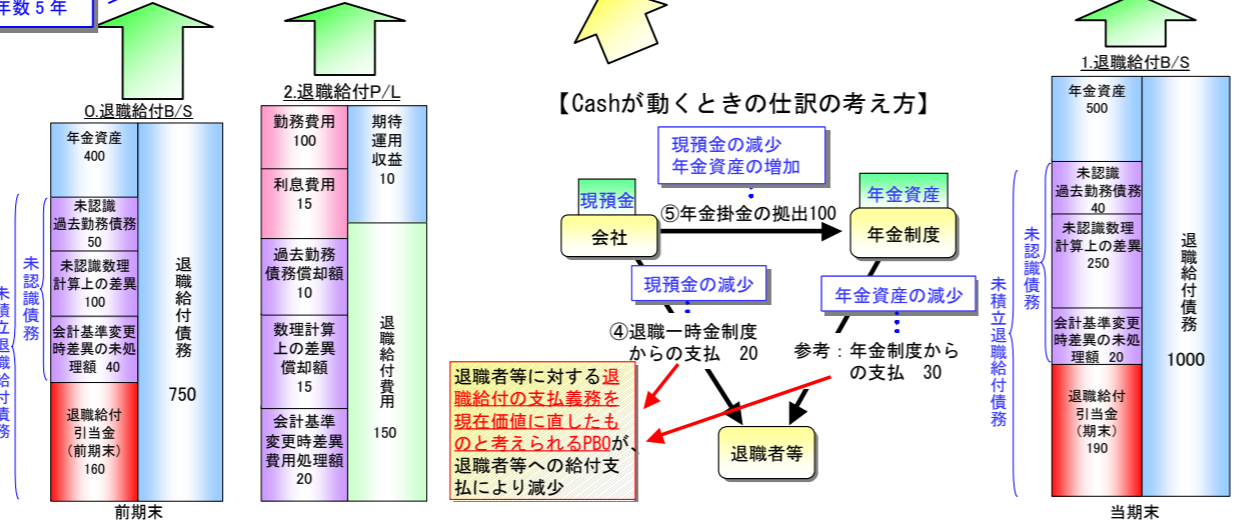
【Point④】:
 このワークシートの目的は、当期における退職給付引当金の推移と当期の退職給付費用を算定すること、つまり最下段の欄の数値を算定することにある

退職給付B/S上の項目	A	B	C	D=A+B+C	E=F-D	F
	期首実績 ×1/4/1	退職給付費用	掛金拠出額/ 給付支払額	期末予定 ×2/3/31	数理計算上の 差異	期末実績 ×2/3/31
退職給付債務	(750)	S (100)	P1 20	(815)	(185)	(1,000)
		I (15)	P2 30			
年金資産	400	R 10	C 100	480	20	500
			P2 (30)			
未積立退職給付債務	③=①+②			(335)		(500)
未認識過去勤務債務	④	A1 (10)		40		40
未認識数理計算上の差異	⑤	A2 (15)		85	165	250
会計基準変更時差異の未処理額	⑥	A3 (20)		20		20
前払年金費用(退職給付引当金)	⑦=③+(④+⑤+⑥)	(160)	(150)	(190)	0	(190)

20 = 会計基準変更時差異発生額 100 [Z] ÷ 償却年数 5年

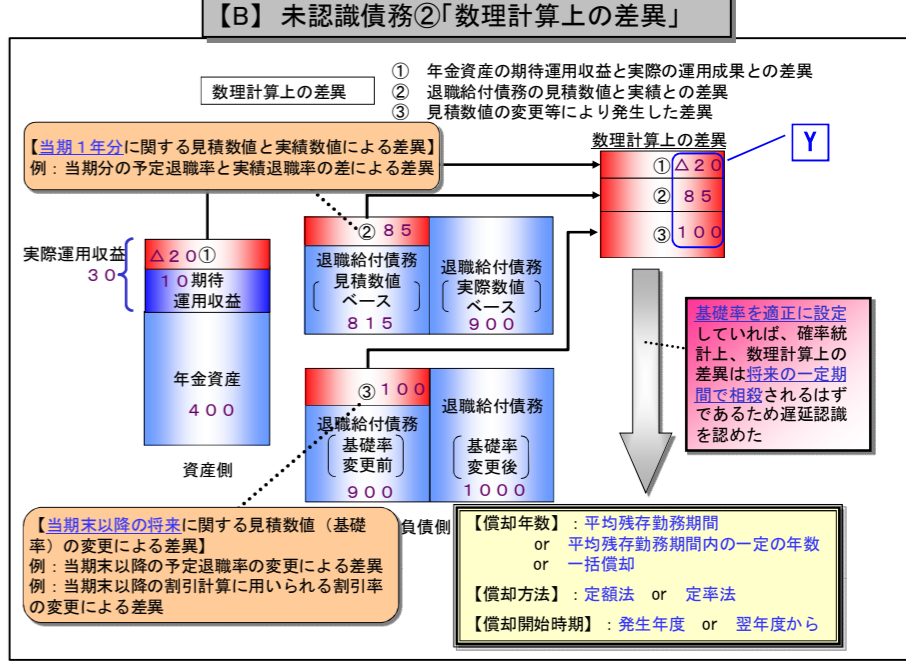
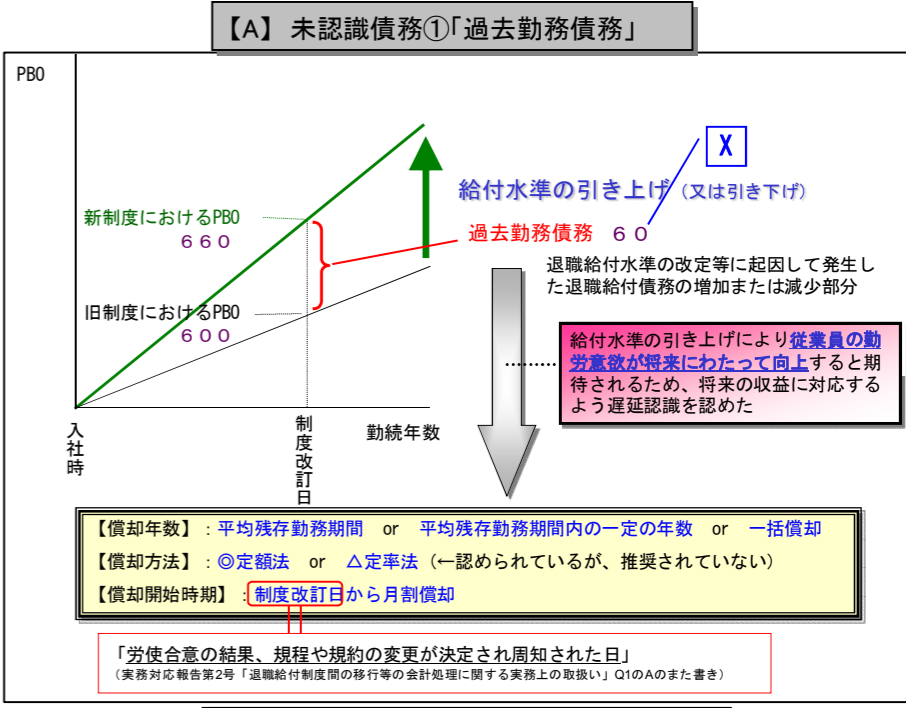
10 = 過去勤務債務発生額 60 [X] ÷ 償却年数 6年

注) 本体系マップの数値例は、全て基本編と共通の数値です
 (基本編における仕訳一覧と照らし合わせてご覧頂くと、理解が深まります)



3.B/S退職給付引当金勘定

掛金拠出額	100	退職給付引当金(期首)	160
退職一時金制度からの支払額	20	退職給付費用	150
退職給付引当金(期末)	190		



- 【参考】略語の説明**
- S 勤務費用
 - I 利息費用
 - R 期待運用収益
 - A1 過去勤務債務当期償却額
 - A2 数理計算上の差異当期償却額
 - A3 会計基準変更時差異費用処理額
 - P1 退職一時金制度からの支払額
 - P2 年金制度からの支払額
 - C 掛金拠出額

